

親鸞仏教センター副所長定例講座

「『歎異抄』思想の解明」第Ⅲ期・第2回（通算第22回）

第四章——浄土の慈悲（2）

加来 雄之

=====

I 『歎異抄』第四章の原文と訳

(1) 原文と安良岡口訳

<p>第四章（蓮如書写本）</p>	<p>安良岡康作『歎異抄全講読』口訳。（原文にない訳文には□を、訳として検討したい箇所を<u>下線</u>で示した。）</p>
<p>四 一 ①慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。 ②聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐむなり。 ③しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。 ④浄土の慈悲といふは、念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。 ⑤今生に、いかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。 ⑥しかれば念佛まふすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらうべきと云々。</p>	<p>一 ①〔仏道の〕慈悲には、聖道〔門〕と浄土〔門〕との相違する所がある。 ②聖道門の慈悲というのは、〔この現世において、〕人をかわいそうに思い、いとおしみ、守り育てることである。 ③そうではあるが、〔自分の〕思い通りに、終りまで助け通すことは、この上なくむずかしいことだ。 ④〔一方、〕浄土〔門〕の慈悲というのは、〔この世では〕念仏し、〔浄土に往生すれば、〕速やかに仏と成って、<u>広大な慈悲の心</u>をもって、思い通りに、あらゆる生き物に<u>福利を授ける</u>ことだと言ってよいのである。 ⑤この世に生きている間は、どんなに、かわいそうだ、同情すべきことだと思っても、思い通りに助けることが困難なのだから、この〔聖道門の〕慈悲には、<u>結末がつかないのだ</u>。 ⑥だからして、〔<u>私たちにとっては往生のために</u>〕念仏申すことだけが、終局まで貫徹する〔如来の〕<u>広大な慈悲の心</u>〔<u>にかなうこと</u>〕なのでありましょう。……</p>

【永正本との校訂】とくにナシ。

(2) ・加来の第四章の構造的な理解

- ①は、主題の提示
- ②③は、「聖道の慈悲」について
- ④は、「浄土の慈悲」について
- ⑤⑥は、「かわりめ」について

(3) 安良岡口訳と加来試訳

安良岡康作『歎異抄全講読』口訳	加来試訳
<p>一</p> <p>①〔仏道の〕慈悲には、聖道〔門〕と浄土〔門〕との相違する所がある。</p> <p>②聖道門の慈悲というのは、〔この現世において、〕人をかわいそうに思い、いとおしみ、守り育てることである。</p> <p>③そうではあるが、〔自分の〕思い通りに、終りまで助け通すことは、この上なくむづかしいことだ。</p> <p>④〔一方、〕浄土〔門〕の慈悲というのは、〔この世では〕念仏し、〔浄土に往生すれば、〕速やかに仏と成って、<u>広大な慈悲の心</u>をもって、思い通りに、あらゆる生き物に<u>福利を授ける</u>ことだと言ってよいのである。</p> <p>⑤この世に生きている間は、どんなに、かわいそうだ、同情すべきことだと思っても、思い通りに助けることが困難なのだから、<u>この〔聖道門の〕慈悲には、結末がつかないのだ。</u></p> <p>⑥だからして、〔私たちにとっては往生のために〕念仏申すことだけが、終局まで貫徹する〔如来の〕<u>広大な慈悲の心</u>〔<u>いかなうこと</u>〕なのであります。⑦……</p>	<p>第四章</p> <p>【主題の提示】</p> <p>①慈悲には、〔自力〕聖道〔門の立場から、他力〕浄土〔門の立場への〕<u>変わりめ</u>があります。</p> <p>【「聖道の慈悲」について】</p> <p>②聖道〔門〕の慈悲というのは、〔この現世で自力によって〕人を、かわいそうに思い、いとおしみ、守り育てことです。</p> <p>③けれども、思いのままに助けとげるということは、きわめて実現が難しいのです。</p> <p>【「浄土の慈悲」について】</p> <p>④浄土〔門〕の慈悲というのは、念仏して、ただちに仏（となる身）となって、（阿弥陀の）大いなる慈と大いなる悲の心によって、思うがままに生きとし生けるものを利益することをいはずなです。</p> <p>【「かわりめあり」について】</p> <p>⑤今の〔迷いの〕生にあっては、どんなにいとおしいと思ひ、かわいそうだと思ってみても、<u>自分の意のままに助けることはできないので、このような慈悲は始めも終わりもないのだ。</u></p> <p>⑥そうしてみると、念仏もうすことだけが、最後まで徹底した大いなる慈悲の心で<u>ありましよう、</u></p> <p>⑦と〔故親鸞聖人は〕教えてくださいました。</p>

=====

## II 第四章の学びにむけて

### (1) 安心訓（第一章～第三章）の人間観と慈悲の問題

・安心訓から起行訓へ

・安心訓の「罪惡深重煩惱熾盛の衆生」（第一章）、「いずれの行もおよびがたき身」（第二章）、「煩惱具足のわれら」（第三章）という人間観に立って、慈悲という仏教において他者を利益する原理を問い直すのが第四章。

【参考】「また、「うみかわに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまに、ししをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがらも、あきないをもし、田畠をつくりてす

ぐるひとも、ただおなじことなり」と。「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」とこそ、聖人（親鸞）はおおせそうらいしに、」（『歎異抄』第十三章、『聖典』（第2版）776頁）とある。

- ・私たちは、世福の中の「慈心もて殺さず」という経言にどのように向き合うのか。
- ・第四章の背景にある告発。
- ・念佛者は他者への慈悲を免責されるのか。
- ・法然や親鸞は他者に無関心であったか。第四章は、他者への無関心などではなく、むしろ慈悲という他者への関わり方を真摯に求めたときに生まれた痛みに基づく語りではないのか。

親鸞はみずから「小慈小悲もなき身にて衆生利益はおもうまじ 如来の願船いまさずは苦海をいかでかわたるべき」（『正像末和讃』「愚禿悲歎述懐」（『聖典』（第2版）622-623頁））

「小慈小悲もなけれども 名利に人師をこのむなり」（『正像末和讃』（『聖典』（第2版）626頁））と示している。

- ・愛と慈悲について

=====

### III 第四章の主題の提示

①慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。	①慈悲には、〔自力〕聖道〔門の立場から、他力〕浄土〔門の立場への〕 <u>変わりめ</u> があります。
-------------------	--

#### (1) 「慈悲に」

・仏教においては、他者と関係する実践の原理を「慈悲」と表現する。仏がすべての衆生に対して、これを生死輪回の苦から解脱させようとする憐愍の心。智慧と並んで仏教が基本とする徳目。

慈（マーイトリー）……与楽

悲（カルナー）……抜苦

但し『大智度論』には異なった見解が示されており、曇鸞は、「二には慈悲門に依れり。一切衆生の苦を抜いて、無安衆生心を遠離せるが故に」（論）とのたまえり。苦を抜くを「慈」と曰う。楽を与うるを「悲」と曰う。慈に依るが故に一切衆生の苦を抜く。悲に依るが故に無安衆生心を遠離せり。」（『聖典』（第2版）336頁）と註釈している。

- ・二種の慈悲

『歎異抄』の背景とされる『観無量寿経』には「慈」の心に二種が説かれている。一つには、世福の中の慈心と第九真身観に説かれる仏心としての大慈悲である。

三福の慈心と第九観の大慈悲（大慈大悲）。

- ・「かの国に生まれんと欲わん者は、当に三福を修すべし。

一つには父母に孝養し、師長に奉事し、慈心ありて殺せず、十善業を修す。」

（『観無量寿経』序分、『聖典』94頁）

・「この観を作すをば、一切の仏身を観ずと名づく。仏身を観ずるをもつてのゆえに、また仏心を見る。仏心というは大慈悲これなり。無縁の慈を以て、諸もろの衆生を摂す。この観を作せば、身を捨てて他世に諸仏の前に生じて、無生忍を得。」

(『観無量寿経』第九真身観、『聖典』106頁)

・「平等の慈悲」と大慈悲

「法蔵菩薩、昔、平等の慈悲の催されて」(『選択本願念仏集』本願章)

「願海平等なるがゆえに発心等し、発心等しきがゆえに道等し、道等しきがゆえに大慈悲等し、大慈悲はこれ仏道の正因なるがゆえに。」

(『教行信証』信巻、『聖典』(第2版)274頁)

・智慧と慈悲の関係

「応知というは、いわく、智慧と方便とは、これ菩薩の父母なり。もし智慧と方便とによらずば、菩薩の法、則ち成就せずと知るべし。なにをもつてのゆえに、もし智慧なくして衆生のためにするとき、則ち顛倒に墮す。もし方便なくして法性を観ずるときは、則ち實際を証す。このゆえに応知という。」

(『浄土論註』下巻、名義摂対章)

・三縁の慈悲

三縁の縁(アーランバナ)は対象、所縁の意。

衆生縁……小悲 二乗

法縁 ……中悲 菩薩

無縁 ……大悲 仏 大慈(大)悲心

・曾我量深の「無縁の大悲」理解について……機の深信の「無有出離之縁」と無縁の大悲

・加来は、三縁の慈悲の関係を種別や段階ではなく、層もしくは深さとして理解したい。

## (2)「聖道浄土の」

・ここでいう浄土は浄土門である。浄土門とは往生浄土の教えである。

・聖道門と浄土門の決判——仏教の世界観のパラダイム変換——道綽『安樂集』と法然『選択本願念仏集』の根本関心—時機の問題に答える仏教

一代聖教を聖道と浄土とに区別する教判は、道綽によってはじめてなされた。それを仏道の教相判釈として選りとったのが法然。

(1) 本師道綽禪師は

聖道万行さしおきて

唯有浄土一門を

通入すべきみちととく

(3) 末法五濁の衆生は

聖道の修行せしむとも

ひとりも証をえじとこそ

教主世尊はときたまえ

(『聖典』(第2版)596頁)

・ちなみ浄土門とは、浄土を語る教えではない。大乘仏教であれば諸仏菩薩の浄土を語る。浄土門の独自性は、「往生浄土の教」えであるところにある。それゆえに道綽は生死を排うための「二種の勝法」として「一つには謂く聖道、二つには謂く往生浄土なり」と的確に表現するのである。

・聖道と浄土という、仏道の二つの範疇の根本的視座はどこにあるのか。

龍樹……難行・易行は仏道修行

曇鸞……自力・他力は菩薩道

道綽……聖道・浄土は教門

その聖道(成仏)か浄土(往生)かの決判がなされる根にあるのは、教理の優劣ではなく、機(人間のありかた)、時(時代のありかた)への深い関心であった(道綽の『安楽集』は、今の時を、一由去大聖遙遠、二由理深解微と押さえる)。道綽は本願文の「十方衆生」を『観無量寿経』下々品に照らし、「縦令一生造悪」「若論起悪造罪、何異暴風駛雨」と読みかえ、造悪のものが仏になるという問題を称我名号、往生浄土として応えたのが浄土門と定義している。

・具体的に親鸞が比叡山を出て法然のもとに身を投じた意味、とくに慈悲(衆生との関係)の問題についてはどのようにいえるのか。

### (3) 「かはりめあり」

・「かわりめ」の語義——相違か、変移か

『広辞苑』(1)代目：物事のいれかわる時。交替する時。(2)変目：(ア)物事のうつりかわる時。(イ)けじめ。ちがいめ。

『古語大辞典』(1)物事の入替わるとき。交替する時。交代期。(2)変わっているところ。相違点。

・聖道(自力)から浄土(他力)へ

・寺田正勝『歎異抄講話』(1982)。広瀬杲『歎異抄講話、高倉会館法話集1』(1994)行き詰まる聖道の慈悲行、挫折を契機としてそこに転機が生れる。

・人間というものの限界の真実の自覚において与えられる念仏は、助ける身から助けられる身への宗教的転換を意味する。

自覚の経過をうちにはらんだ、実践的な立場の転換を意味する。「いれかわる時。交代する時」や「うつりかわる時」と理解する。